

翌日はいろいろなことが動き出すことになる。「漂着モノログ」には、巡視船ツアーの話題とともに、十月七日の開催予告が晴れて掲載され、higata@jhaは、冬木のお詫びの一文と問題の情報誌掲載稿が流れた。どうやら予告の掲載を断られたとしても、自分で別会場を用意するつもりだったようで、「情報誌読者専用受付にお越しください」との一文が付されていた。何とも無謀というか突飛というが、仕事柄、イベント慣れしている、ということなんだろうか。どっちにしても、受付はしっかり設営した方が良さそうである。

十八日、十八時。終業時間になったが、櫻はここからがひと作業である。皆で下書きした素案をもとにPC上で、タイムテーブル（兼 分担表）案を打っている。「いつ・どこに・誰が」配置されているかが一目でわかる、というのはこの手の催しでは要目となる。この辺りを会得できたのは、18きつぷツアー中、千歳マネージャーに赤入れを頼んだのが利いた。短時間であっても、プロセスを「見える」ようにする。それは心得の一つである。「櫻さんとの恋の行方とも考えてるのかしらねえ・・・」と彼女はちょっと違うことを考えながらも、軽やかにカタカタとやっている。

そんな折り、軽やかとはいかないが、澁刺はつらつとした足音が近づいてきた。

「あら、センセ。お早いお着きで」

「おう、矢ノ倉女史に、千住の櫻さん。今日も華があつて結構結構。何か落ち着かなくなつてね」

早速、紙燈籠の分析結果から。

「エーッ、あの灯籠一つで、CODが十二グラム、BODが六グラムちょっと、ですって」「まあ、何だかそれなりに負荷がかかってるって話だな。実験でドロドロにされちゃったから、今はこのザマ・・・」

手にしたのは二重三重にパッキングされた透明袋。ゲル状の怪しげな物体がへばりついている。

「これじゃあんまり供養にならない、かも知れせんね」

「て訳でさ、こういうニュースを自分のブロック、もといブログで発信できりゃいいんだけどさ。隅田君にここで見てもらいながらじやないと、何だあな」

「今ちよつと助手がいますから、呼んで来ますよ」

誰の助手なんだかよくわからないまま、とりあえず眼鏡の女性がやって来た。助手と言われれば、確かにそれっぽい、はて？

「センセのブログって、さくらブログと同じ理屈でしょ？ レクチャーしていただくと嬉しいんだけど」

「千歳さんから、何か受け取ってます？」

「あ、説明書預かってたんだ。失敬」

「さすが、知らぬ仏のおふみさん！」

先生がいよいよがまいが、毎度この調子。「おふみさん、てか。今度からそう呼ばせてもらおうよ」 櫻もお節介になったものである。

センター備品のデジカメで、ドロドロになった元燈籠（これが本当の紙ドロー？）を撮り、メモリカードをPCのスロットへ。

「左側の『新規記事』を選ぶと、入力画面が右に出てきます。タイトルと本文が最低限入っていれば、すぐ掲載できますが、今撮った写真もせっかくなので」

「画像選択ボタンを押して、ファイルを参照させたところで保留。先生には記事本文をその場で打ってもらおうよ」

「画面下の『保存』を押すと、確認画面が表示されます。ここで切っちゃうと水の泡になっちゃうんでご注意を。最後にもう一回『公開』を押して、完了です」

「完了って、これでホームページに載るってか？」

「ええ、ホラ」

櫻のブログは末尾が“`todo/eta/`”だが、掃部先生のは、その名もズバリ“`conon/`”になっている。俄か助手は苦笑しながらURLを打って、掃部ブログをその場で披露する。

「いろんな人に見てもらったための工夫とか、記事に対しての反響を集める仕掛けとか、レイアウトも変えられますし、ちょっとしたお遊びみたいなのも載せられます。自由自在なんですよ」

「いやあ、こりゃ参ったな。本にしなくても、これがあれば言いたいこと言えるって、か」

「ブログで書きためといて、あとで本にするのもいいんじゃないかって。ブログの設計者さんは言っていました。先生、次の新作に向けて、いかがですか？」

「あんまり書き過ぎると、ネタばらしになっちゃうよな。でも、早く伝えたい場合はそれもいいか」

櫻と入れ替わりにカウンターに着いていたチーフが戻って来た。

「センセ、相乗効果つてもあるんですけど。ブログで小出しにしていって、本で堂々と内容を公開。本が出たら今度はブログでこぼれ話とか追加情報とか。どうですか？」

この日は、Cononプログラムのリリース日にもなった。だが、今日先生に来てもらったのは他でもない。別に大事なお話が控えている。

「櫻さん、ありがとね。時間外つけといてもらうか、明日、シフトしてもらうか、お好みで」

「文花さん、先生とお話あるんですよ。私、カウンター入ります。でも、仕事っていうか、昨日の続きやってるんで、別に手当てかはいいいですよ」

「わかった。おすみさんとのデート権、てのどうっ？」

「じゃあどうかデート休暇、ください！」

こんな感じで今のところは勤務形態も緩やかだが、法人化された暁にはそうもいなくなるかも知れない。そうした点も含め、代表理事の意向と一つのを固めておきたいところ。今日はその前段となる相談事である。

「当センターの運営団体を法人化するにあたり、役員を決める必要があります。掃部さん、ここは一つ一理事として、いえ、代表理事を前提に役員の就任をお願いしたく」

「ハハア、そういうことが。他の役員さんは？」

「これまで関わっていただいた方がそのまま、という訳にもいかないので、ちょっとした内規を作って、選考過程を経てもらおうかな、と。今、その途中です。他にも役員候補者を募って、代表理事はそこから互選することになりますが、ある程度、この方！というのを想定しておかないと、定款とかも作りにくいんで。その・・・」

「おふみさんのお願いとあっちゃな。例のし鴻の皆さんと一緒に何かできるんなら、喜んで・・・」が、しかし、

「と、言いたいところだけど、もうちょっと考えさせてくれねえかな。まだ平気だろ？」

「ええ。とにかく役所関係と渡り合えるって言うか、市民主導のセンターにしたいんですよ。官製の特定非営利活動法人とか、そういうのにしたくないんです。で、何と言っても、地域への愛着というか愛情を共有できるような、そんな場所に・・・」

文花は思いが溢れて、言葉が出なくなるも、先生はウンウンと首を振って得心している様子。

「次の片付けはいつだっけか？」

「あ、来月七日、十時集合です」

「じゃ、そんな時に返事するよ」

「どっちにしても、終わった後にお時間くださいネ」

十九時を回った。櫻はまだカタカタやっていたが、あることに気が付いた。

「誘導係って決めてなかった、かも」

文花は、今ひとつスカッとしていないものの、少しは手応えを得て、ホッとしている。

「あとは他のNPO法人に倣うというか、できれば失敗例とかがわかるといいんだけど、かくして、二人は同時に声をかけ合うことになる。が、ここは年長優先。」

「隅田さんて、ジャーナリスティックなところあるけど、NGO/NPOのことって、詳しいかしら?」

「情報にはいろいろ接していると思いますけど、ネットワークという点では宝木さんの方が上でしょうかね」

「ここは一つhi.gat a@かな?」

「じゃ、私も相談メール打とうつと」

「あ、そっか、何の話だった?」

「今度のクリーンアップ、公開参加型だから、会場誘導の係が要るなあって思って」

「昨日の打合せで、ルフロンさんが未定って言ってたけど、彼女は?」

「舞恵さんだけに、前で張ってもらったって? うまい!」

「どっちみち、案を流すんですよ。その時に確認、ね?」

hi.gat a@の発信は、職場からでもできるようにしてもらっていた。タイムテーブル(兼分代表)案は、出来立ての状態で配信される。より早く確定できる、という点でこつした設定は重要。だが、ついでが回って、「注意書きとタイムテーブル、手書きで行くか拡大コピーするか、ムム」など、新たな悩みが生じることもなる。「も一回、追伸メール、発信!」

メールングリストというのは便利なものだが、職場で使える、というのは時に考え物かも知れない。いつそ、クリーンアップ活動をセンター主催にしまっ、という手も・・・いやいや、ONとOFFの区別がつけにくい、それでいいのである。緩やかな状況にあってこそ、その人の持ち味が活かせる、そう心得たい。

十九時半を過ぎ、櫻はセンターを出る。「しまった! 蒼葉に連絡してなかった」 妹は食卓で待ちぼうけ。クリーンアップ関係の作業は、帰宅後(OFF扱い)の方がよるしいよつで。